重修真書太閤記

六編

五

天

へ13
459
55

消印 福

へ13 特
門 号 459
巻 55

Wortsträt eines
Schloß von
Takamatsu
4
W. Wort

同攻會印

重修眞書太閤記六編卷之十三

高松城中口論の事
并林三郎右衛門尉長沼を討事

去程ふ高松の城ふハ清水長左衛門宗治を大將とーて其兄月清入道難波傳兵衛廣高與力ふハ林三郎左衛門鳥越左兵衛松田左衛門等をそーめ撿使ふハ末近左衛門尉家國其外中島大炊助片山助兵衛長沼元之丞同山三郎荒木の一黨をそーめ都合五千餘人ゐて楯籠る

備中國都宇郡撫川ふ荒木氏あり尾州荒木村注人吉田五郎次男荒木筑前守と云もの丹波國北畠ふて戰死そ

の子弥三右衛門吉宗小早川隆景の手ふ屬し此處ゑ住
をゝ云吉宗天正六年戊寅ゑ生れられハ高松籠城を六
歳ゟ又撫川の荒木ゑ鷹の羽一黨蔦一黨澤瀉一黨と
く三黨あり鷹の羽黨を清水長左衛門の後と云
要害よろしく兵糧玉藥ハ多し筑前守の大軍を少しも恐
れを義心鉄石の如く堅固ゑ籠城したりけゑ筑前守を両
三度龍王山のあなたにく關を作ゑ鉄炮を打たるまきに
してあるかちゑ城を攻んともせに晝夜をいそに土俵を
作り堤を築をけるを城中より望ミ見く若きものをこれ
を笑ひけるか折しも五月雨ふりをきり山々谷々の水ゑ
しく思ひの外ゑ堤をおしろい寄手ハ土俵を積かさゑ

けるゑより溯々としく湖水の如くふるふりけ高松の在
家を一宇も殘さにおし流し今ハそや城の大手の城門を
ひさし外郭をたゝ一面の滄溟ゑ似たりされとも宗治さ
えくけしきも見さに諸士を本丸ゑあつめやける ハ寄手
大軍ゑれとも當城の地形堅固ゑ面々の勇氣盛るを以
く弓箭をとりく優劣をあらそふをせにようて我等ゝ
武畧の上方侍ゑ勝たるをハいふゑ及を水堰の謀を用
ゐと見ゆきハ定めく本丸までも水たく回へしさりとて
我く毛利の恩を請しを泰山かへりく畢く來海もまゝ淺
したとひ水中の藻屑とゑらハ成れ末代忠義の名をハ汚
さじ趙襄子ゝ晉陽ゑ圍まれし時乃水も今ゑよも勝らし

きれとも終よ運を開きしゝみあらをやと云く顔色をこし
も常よかをらを諸物頭より諸侍よいたるまてこれを聞
ものいりきも心を金鉄ふ比し髪冠を衝りとおもをれた
卫中ふも長沼元之丞をくこ出をやけるハ仰の如く恩義
を知を以て侍といふとハ誰もく知をみていいりくか臆
病未練の心をおこしゝへきもしまゝ當城を出く命を全
くしいともいくらをりの栄花を期しゝへき敵定めて
よせ来るふハ船ふくふ拵あるへをれ水練を以て船底を
操ぬき船を覆して皆殺ふふしてくれいへしさてこ拵く父
り忠魂もさをかし慰をいへそれ但長き籠城のとにい面く
志ををけまし心を養ひ勇氣を発ゆゆせさらんとふ拵く

肝要ふれと勇を立ハいりきもたふりと同しけるか寄手
弓矢の立合ふかふをしとおもへをふを加様よ拙ふき謀
をふしいなれ早く船ふてよせよかしその時も日頃の鬱
氣ををらを程の働きして上方武士の居庭をさまし中國
侍のきたひよ鍛ひし義剣をふるうく累代の大恩よ報を
へきハ今この時よていいかやうに四方水ひたしにふりい
ていいりふ命おしくい共のられ出へきものあるましく
結句寄手ふ味方のさめよ武功を勸むるとおふえいとい
へハ長左衛門大よ悦ひ諸物頭衆諸侍中かくまて毛利家
を大切よおもをれい事いうみも元就卿のふしおられし
軍令を隆元元春隆景のよく守らをへハふをとをそろ

よ涙をかゝ〜各〜やかとよれもひ切ゐふからハ明日ゐ
も軍あらんときハ最初よ戰死あるゐらんいさや敵のよ
せさるあひたに酒宴を催ふ〜ヤへしこの比用意〜てい
形りとて柳おかくかき出させさゐくの者とも山の如く
よ盛たゝ〜大廣間よ敷ゐらへいつれもの心をゐくさめ
けり爰よ林三郎右衛門ハ去おろ冠山の城落〜時ひそか
ふ遁れ来ゐて當城よ入清水を頼ゝ居たりけるか長沼ゝ
言葉の耳よかゝゐ黙然とし〜てかたへよよゐゝ川くゝと
おもふよ長沼ゝ當城を出ゝ命を全せ〜そいひ〜すゝ其
餘の人〜も水ふかけれえ命おし〜とも遁れ出へきものあ
るすゝとも云りるふれ去ハ長沼めゝ常ふ某ゝ冠山をの

かれ出〜とを臆病未練とさたせ〜故ゐるへ〜と我身の
上を見るとをくらけれハ水門ゝ脱ゐ出〜とをハおも
そ〜ゐ只人をのゝ恨をける林ゝ心そうとゝ〜きかくとハ
知ゐ人〜ハ次第〜ふ汲かえ〜遠山越ふ麻中雀順〜るゝ
逆〜るゐ循〜と盃の廻るふつけ三郎右衛門いゝやおの
次を以て長沼めよ耻あたえんとおもひ設て盃の長沼へ
めく形をまちて居たりけるよ人をかくとも心付ねハ誰
ふかあゐけん思ひざしヤ〜ゐ長沼とのと云り〜大盃をさ〜
ゐかハ長沼元より上戸形りあゝ〜と引うけゝるを見て
林三郎右衛門長沼ゝそはふゐそゝて着まいらせん長
沼とのといひり〜焼鳥ををちめハ長沼けーきを損〜某

が父にていもの戦死していまだ四十日に満ず軍中なれ
ハ御ゆるしを蒙りかゝる筵にいらるゝハ得共焼鳥の御肴
を御心にしきやへしと云ハ林も膝立なをしおもけしか
らぬ所存かなさハ大将の御前なり且籠城の鬱氣を散せ
んための酒宴之其上大将の仰に明日にも敵のよするなれ
きハ間あるまじ今生の名残のはふなれきやくめやくめな
るハ瀧の三川兵のましそりなるを父が忌にいはそ焼鳥
いなといそるてからハかたきの首をもう川ましきやとい
それて長沼なたふ那様あやまちいぞ林殿何にも其の御
肴たべうきるふそいといひもえて頂たく一口にかそく
たきまとに得るたき味やも御ともふさきひしものをあ

そ沼のままもかくれの獨寐とかこちおし鳥もゆりと聞く
それハいもせのたそれこと是ハ親子の恩愛を断とも誰か
断えてん心の底のやる瀬なやちるふ摧く那胸のうち思ひ
定めを盃とりいけいかに三郎右衛門殿この盃を参らせ
いそんそいそれを林ちかたしけるしとおしいたゞきて
かど受てあらそぶせハ長沼さしより見事にい林殿是を肴
に今一獻と脇指の小刀抜て差置ハ林ハきもをけし長沼
殿にハ珍敷御肴引れをいものかな貴所にハ小刀を喰れ
いや我等ハ左様乃歯ぶしをもたんと云ハ長沼うち笑ひ
今日の酒宴ハ大将の御心入にて今生の名残のまとゐさ
只今貴邊のいそれしとを御忘れか主君の賜ふ御酒もう

ふもまた私のもうけおも小袖引かた衣引をふり引ひさたれ引小刀引とて品く引物いをあらをゑぬとをゐら
ー是非ゑ御受ゆて又此方へ何形うと御心ゑうかへるも
のを給そらんといそれを林ゑ赤面ー是ハ我等ゑ田舎ゑ
おいさち都方の禮式を知ぬを知ゑ態と恥ゑまーき目を
見をけるゑ巷あらんをらめゑくき長沼ゑ振舞や其座ハ
起をーものをと胸をを忍刀ゑ手をかけ飛あくらんとをる
を見て長沼もおゑーく立上る処を月清入道をやくも見
をけ林を抱へてをこーもゆるめを末近左衛門ハ長沼を
押えてそたらかせば二人の氣色たくみらを酒のいえを
るくせゑらん明日ハ何も花くーく軍ーて毛利家のえが

ねを以て上方武士の骨をためさんおもーろさをいまう跡
へや人くといそれゑく両人も心付握ー刀の柄をゆるへし
ゑハ左右ゑ引をけ末近月清さゑくと異見を加えける時
長左衛門聲高やゑゑ長沼林たーかゑ聞給へ籠城ハ何の
為そや只今織田信長の先鋒として羽柴筑前守ゑ寄来て
たる故ゑらをやそれゑ同志打ーて味方を損し敵ゑ徳付
る不忠ものか初て左ゑ契らさをーをといそれゑ両人い
よくそぢ入ーを見て一座の人く彼是とゑためーゑとゑ
長沼ゑち笑ひ大將の仰ける如く日來ゑ筑前ゑ會てこそ
をもかくもゑらめと思ひためー身の何とーてかやうゑ
くるひゐやと我ゑからゑ口惜く今より別儀ゆそー無禮ゑ

御免を願ひいと神妙ふ述しかハ林も今更耻のしく長沼殿のいそ弱く如く某とても敵をあそ目ふかけめと思ひしふれ何とて傍輩といさかひし打果さんと仕さるけん全く天魔の所為とおもかえハ哀れ別義を以て無禮を御ゆるし給そうハへと懇みやけるふより左ハてあそ真實の武士とヤへそれいよく鋭氣を養ふて明日の軍ふ高名しめへ然らハ中直りの盃取かえしめへと長左衛門の指圖ふて又一巡ありて後両人快く語を合をのゝ役所へ引取しゝ林ハそふわく長沼を恨をひそゝふ役所を忍ひ出長沼ゝかへる路を志し幕串のかけふかくれて待そとも神ふらぬ身の知ハこそ酒ふハ酔ひ夜ハ更つ足元しそろふ

あゆを來るをやり過しし後より肩さきかけて切かけたり長沼ゝかさに抜合を何ものゝ技と云もあそを切かうしかハ折ふしゝ夕立そけしく幕串を吹倒しけるふ躓き長沼ゝ倒るゝ処を得たるとたくそかけ遂ふ切ふせ止をさし立かへる処を若き侍中おりかさるる縄をかけて見れハ林三郎右衛門也長沼山三郎是を聞悪き林ゝふるまひ哉父ゝ仇なり打ゝ恨をそらしたしそ願へとも林ゝ軍法ふ行ふへき罪人ゝ成りゝそくゆるされそ山三郎ふゝ父ゝふきからを厚く取おきい得とて渡されゝ

長沼山三郎林を宇内ふ殺し立退事

并荒木舎人敵陣へ使者の事

林長沼ゝ及傷の始末追く吟味しけるゑ足軽一人即死手負し者三四人も有しかい弥軍法ゑ行そるへきゑ定まり
し處山三郎おして仇討を願ひしかハ長左衛門そよび末近
左衛門山三郎を呼寄て其方のヤ立らる処道理至極な
りと云とも林ハ其ゝヤ付し和議を破ゑこれハ大將の命
を叛きし罪一川次ゑ武士道をそつしだゑしうちゑ傍輩
を討臆病の罪二川次ゑ召捕ゑ向ひし者を殺もし手も負
さうる罪三川此三罪あれハ山三郎ゝ願ゑ任かさしと云
渡しゑゝハ山三郎力をよそにそやせんかくやさんと勘
へけるか敵ハ長陣の容子ゑゝ味方ハ水ゑ攻られて運を
開くとハ誠ゑかたあるへし所詮願ふそ聞ゑけゑあきは

こて共ゑ天ゑいたづくへき仇ゑらにとおもひつめ林を
押込置し牢ゑ近川き番人のひまを伺ひ管鎗を以て林を
突ふせ錠ゑち切そ内へハ首打をとしふくさに包そ是を
脊負鍵縄を塀ゑ打かけ棟ゑ上ゑ一息ゑく處へ番人とも
追かけ来ゑ塀ゑ楷子をかけ山三郎のかそまそひしめ
けハ山三郎小刀取てそつしとうゑ誤たそ先ゑ進そし足
軽ゑ中ゑ楷子すゝ真倒ゑ落てけゝ其間ゑ塀を越てそる
ゑ洪水そちくたれハ其侭飛入ぬきてを切ておよきゆく
山三郎ハ力ゑまかせてをよきゆく疲夕れハ立樹の梢ゑ
やそらひゝくそや三十餘町を隔そゑ追手の者共いゝよ
あきれそも及ふへくも見えそ中島大炊助水練のものを

入て追ぬるとも程遠し鉄炮ゐて打取と下知しけきハ心得ハとてう川鉄炮の玉水氣ゐもとされあへぬて味方へえねゆへる此間ゐ山三郎ハ遁のひけるを筑前守遥ゐ見川けあれえゐ跡より追手のゆくるのハ反忠のものと見えたり助け来ぬて容子をきけとあいしゆハ大谷廣松かこまぬいといらへして直ゐ堤ゐ下立山三郎を引上本陣へ同道してそれハ少年ゆり背負しものを改むれハ首級なり子細何ゐと尋ぬれハ父の仇を討て立退し者と云年ハ十六歳名ハ長沼山三郎筑前守聞て天晴の若もの哉生前たのもし助けへしとて中村孫平次ゐ預け置るゆる處へ城中より使者と見へ筏ゐ乗て筑前守の陣所ちらく

漕よせてくものいそんと云ゐより加藤孫六の陣より神子田半左衛門出向ふて何事ふやと問ハ某ハ毛利家臣清水長左衛門宗治の名代荒木舎人ゐハ御本陣へ入へき子細有て罷越ハと答ふるゐ依然らハ案内仕るへし但陣中の作法ふハ御一人御越あるへしとて供をハ止め荒木一人を通しけり荒木本陣ふ至ぬて高松城内ゐ於て林三郎右衛門とやもの傍輩長沼元之丞をたまし打ゐ討てハ間召捕て牢舎ヤ付置ハを元之丞ら嫡子山三郎牢番のものを伺ひ林を殺し立退御陣へかけ込ハをたしこのゐ見とめハよりて某受取ゐ伺矣仕るとヤをしにより加藤孫六承そう筑前守ふ斯と披露を筑前守山三郎を惜何ふもして助

そやと思へれー程は加藤孫六をーて答へさせらるー様
ゐ何様長沼山三郎はや名前ハ知る城の方より浮川流る
つよるもの有ふり取上置てハ得共伐討のとも今ら
ハ只今承る山三郎ふらハ決して當陣へ走る入ヤまし
何を證ふ左様のとをハいゑ弱ゝやらんと取あゑねハ荒
木かさねてヤやう城内ゐ水ふひたされ落ふんとも遠か
らハさうとて軍中ふハ軍法あり宗治ゐ下知を破る長
沼をうちー林を牢舎ヤ付置ーは同ーく宗治ゐ止ー伐討
なり然るに牢内へ忍ひ入うちて立退時追手の者ふ疵を
負をーゐ山三郎もまゝ宗治ゐ下知を破る罪林と同ー此
罪を正をいて軍令と云軍令を背ーもの何ふよろーき者

ゐり共助け置く何ゐせん早ゝ筑州へ御ヤいて其御取上
置れー者を某は御見をいへー某一覽仕り山三郎ふてふ
くいゐく其儘御陣ふ残し置ヤへーといふは依孫六もを
まひ兼如何せんと案し煩ひける處は山三郎是を聞父の
伐ハ打ゆふをたり世ふ思ひ置を於ー只今かけこゝー筑
前守の我を惜ゝて渡ハまーといゐるも忝ふし又軍法
たくをといゐるく清水の言葉も道理ふれハ恨むへきに
非と云ふから諸肌おーぬき脇差の刀ふて腹十文字ふか
き切かへを刀ふ咽喉をね切うつふーは成て死ーけきハ
荒木加藤も肝をけしあたら若もの残念ふりやゝ互は涙
せきあへハやる上ゐ是非もふー林ゐ首と山三郎か死骸

を荒木より渡けきは荒木請取又筏より来て城中へ引かへを
一説ふ林三郎右衛門ゟ女ハ清水長左衛門宗治ゟ妾也
此よりこふ依て冠山の城を遁て高松より入りこ故ゟ林
長沼を討し時山三郎の願ふ任せ仕軍法ゟ行そんと云
清水ゟ心一日くと事延引ふ及ふ内ゟ両川の加勢来る
へし然らハ堤を切る水も引へく城中も運を開くへし
其時何ふもして林を藝州へ遣し毛利家の城下ゟ於て
誅せんと云て日を延そうちゟ又謀有へしと思ひし由
を山三郎ふ告る者あり依て山三郎ひそゟ牢ふ入三
郎右衛門を殺りるゟりといふ

重修真書太閤記六編巻之十三終

高松城水攻の事
并両川出張評議の事

去程ふ高松城中ふゟ次第くふ洪水をかさうをにも早き
處ゟ床の上ゟあかるしかハ兵士ハをへて櫓ゟ登る或ゟ
木の枝をたのみゟ竹簀をかさて妻子をくきるとしける
ふとふ叢ゟそふ出梢ゟやと飛鳥もをもへき處を失ひを
のか様くにおよ知りく逃へしる今五尺も水のまさらハ
城中ハをへく水底の藻くをとるへくを見えたりけり筑前
ゟをハ能時郎也城中外ハ湖とりにたる一攻攻て見よや

とて諸陣ふ觸なゝー浅野弥兵衛黒田官兵衛蜂須賀彦右
衛門を軍の奉行とゝふー大船ふ矢倉をあけ城のうちを目
の下ゑをおゝー大筒小筒の鉄炮をえ形ーかけ熊手を堀
ゑ引のけゝ引破ゑ直さ攻入やと下知せら形それゑ續く
諸將の船幾百艘といふとをーらに沖のゝさにハ五色の
吹ぬきふきゝゝー金のひちこの馬ゝるー日蔭まえゆく
漕つら糸ーかハ此城只今せめ落され川へくゑ見えたり
けゑ城ふハ清水長左衛門兄弟死をを形ゑ鵜毛草履より
ハ猶ゝゝく義の重きをハ須弥泰山却くかゑ形らにと互
ゑいさめてゑこーも疼むけーき形く攻口〳〵を專途と守て
防禦の行おこたらに浅野黒田の攻口へハ中島大炊助か

一族荒木舎人ゝ一黨を黒をの〳〵志を一川ふーて晝夜矢石ゑ
身体を川からゝーてものかゑとせに宇喜田七郎兵衛
ゝ攻口ゑ林與三片山助兵衛林與九郎鳥越五兵衛なとを
えーめゑゝて三百餘人爰を破きーと鉄炮を打出ー汗ハ
漿をふかーて戰ふかとふ寄手一万三千餘人多ーといへ
とも塀の一重もやふゝ得ゑ日ゑてゑ夕陽ゑかたふけハ
寄手も今ゑ是まて形うと引螺を吹立れハ一勢一勢引ゑ
かれ船こさかへー堤ゑ上り焼りくけたる陣この篝火ゑ
浪をてらー火あやうーそいまーめて引やさゝらの音た
ゝー城の大將清水宗治諸方を廻ゑて今日の軍の次第を
たゝー利運の後の勲功の賞のゝゝるーの判をいたー又未迄

中島荒木以下打すりて評定ーけるハ先達て藝州へ援を請ていへとも今ハ至て出陣とも見えにかくて援兵延引よ及て落城まをに遠のらーいつきにも今一度専使を馳て急を告へーとて水練者を撰ていさーひそらふ城を出ーけるか如是とう廻ーたる寄手ハりを三間をうかひ堤よ上を得たらんふハ向ふよ見ゆる峯ふて烟を上へーと約束ーてを出立せけるかなの日の暮方にいうり約束の如く峯ふ烟の立ーかハ虎口をのゝれ得ふけうと城中ふてを安心ーて居たうけう寄手のかさにも昨日の軍の評議ーてをふを一日諸卒を休め毛利方の風説を聞きーよ三家の軍勢後詰とーてをや出陣のよーを告けれハさもあるへー中國よを名よ聞えたる毛利ハう定めて勢も多かるへーさをそを誰ゝ是を恐るへき

毛利從三位元就卿ハ鎌倉政所の別當大膳大夫廣元朝臣の曽孫修理亮時親足利尊氏將軍より藝州吉田莊山田村二百貫を賜をそーめて藝州ふ住にそれより十代よ當をのふ明應六年丁巳の歳の誕生なり大内義興よを二十歳をかく尼子經久よハ三十九年の弟ハを弘治三年元就卿六十一歳の時大内家亡ひーかハ防長二州を平均ゝ治めふひ永禄九年尼子家を執て雲伯石隱を合とられーハ七十の時ハゝ其時より藝州因幡伯耆出雲隱岐石見周防長門備後備中備前美作を打從へ給ひ

七十五歳ふて薨せらる今年天正十年より十二年前也
長子隆元朝臣ハ早世あり川さ共嫡孫輝元朝臣今年廿
九歳よく祖父の弓箭を承継ゐひ叔父の吉川元春小早
川隆景梅柳ゑ譬られ一勇將ふさは中國第一の名家と
いえ弱くゐ
然とく敵のよれるを其侭にうち捨おかんもあまりに云
かひ甚しとて舎弟美濃守秀長を大將として備前勢を差
添都合壹万五千餘騎を引ゐけて毛利三家ゑ向ふへしと
ぎ定めら弱爰ゑ毛利輝元朝臣ハ九州ゑ向ひ大友立花と
合戰を挑まれけるか高松より上方勢大軍ふて備中國へ
乱入し味方の城々四五を落し其勢破竹の如く高松を落

さんと攻寄しか城強くして急ゑ落ましきさらハ方便
をかへよとて此節堤をつき兄部川を堰入たさハ高松の
城中まて一面の湖となりゆあれ一刻も早く御出馬有
て上方勢を追拂ひ玉えとも城且夕ふせまりく滅亡遠か
らしと告たりしかハ小早川左衛門督隆景まつ九州を大方
に濟し藝州ふ引返し直ゑ備中へ出馬しゑふ其勢壹万五
千餘騎とぎ聞えし輝元朝臣同く出馬あるけるか雲伯の
大將吉川駿河守元春の許へ高松加勢そしく早く御出馬
い様ふとゝ切らえしけるふ折しも元春ふハ因州鳥取の
城を取かへし去年の遺恨をそらさんと二月上旬より伯
州八橋ゑ著陣あるて大崎の城を攻落しやかて鳥取ふ籠

てたる宮部善祥坊を攻んと用意の處也けるハ高松落城
とは備中國をたちまちよ上方ふ從ふへー然ハ備後國ま
て心元ふーとて嫡子元長次男元氏三男經言ふ雲伯石
三州の勢を差添て進發あるへーてあてけるよ諸勢一同
ふヤけるハ小早川殿ハ上月の城攻よ元春公を引出され
ゐひーか去年馬野山まて元春公十死一生の時小早川殿
ふハ冨田まて出陣ありて馬野山まてハ御越ふー然るふ
又く今度元春公へ加勢を請ゐふとさそ心得ゐえねされ
え我こそ元春公の御供まて因州へハ打出ゐへー高松へ
ハえまそ參るまーてヤけるふより元春ヤされけるハ隆
景の馬野山へ手合のふかてーも定めて子細ゐへーたと

隆景何ふと兼遠ふえたらさゐ共親のかさそにゐへハ元
春ふ於てハ一人なり共備中へえせ上て小早川と安危存
亡を一ゐまに仕りゐへーてありけるふより此上ハ誰のえ
御下知を背さヤへきそて三澤三郎左衛門尉為清同攝津
守為虎三刀屋彈正左衛門尉久祐是等を先とーて出雲石
見の勢一万七千餘騎ふて備中國へ打て出ゐふ
元春の陣をられー伯耆の八橋より因州鳥取を東ふ當
てて今道十二三里を隔ゐまた備中松山ハ正南ふあた
てて廿二三里あるへー
小早川左衛門督隆景備中國へ出張ーて羽柴筑前守の陣
を望こ見ふよ旗馬もるーの紋ハ大形播磨美作備前國の

侍と見えたり其右左ハ備へーハ上方武士とおもはれて
見ふれぬ家の紋なりけり猶奥ふかく備へーハ例の五色
の吹ふらー金のひさこの七川八つ風ふふられて北南それ
とはふーはひくるるおれを正しく羽柴筑前守の本陣
とこ様を見えたりなれ如斯く嚴重ふ備えー敵をたやをけ
ふ切くかくらハ思ひの外ふふ敗軍をへー後陣の味方を
まち付く其上ふ評定せるやと思案の所へ吉川駿河守父
子三人其勢一万七千餘騎ふて到著ありー輝元朝臣ふも藝
州發足の注進ありけれハ隆景大ふ力を得てさらハ敵ふ
向ふく備を立へーとて岩崎の廂山ふ陣を取吉川元春父
子も同ー續さふ帷幕を張ふへハ両川の勢四万余騎とそ

聞えける輝元朝臣ハおふーく三里へたてく猿掛山ふ陣
せら弘其勢八万余騎とかや高松城中ふてハ三家の軍勢
十二万餘騎上方勢ふ比へくハ既ふ一陪ふ及ふと云とも
水また日夜ふ増く今ハそや簀子上ふもつくそかりにふ
ゑーかハ城中の老若男女むふーく水死をんをいかも
歎ーとく宗治より両川へ告けるふより両川の大將たち
うちより評定ーける様ハ此方より日幡の城を責んとせ
ハ筑前守かふらん勢を分く日幡を救そんとをるふらん
さも有ハ両川をへく是を撃んぞ勢を見をハ秀吉旗本ふ
て両川ふ向ひふん其間ふ堤を切て落をへーと云ハ元春
隆景これを聞此謀誠ふ然るへーを一決ーて既ふ其支度

ふかくをけり

桂廣重防戰勇氣の事
并秀吉奇計兩雄を欺く事

筑前守の出し置けるる物聞立かへり兩川の軍勢日幡を取かへさんと人數を出せしを注進しけれハ秀吉大ゑ悅ひ味方乃兵を損をせに敵を討へき奇計ありと心中ゑ笑を含ゑ居給ひける是ゑ元來岩崎の東ゑあたり鴨の岡崎といふ城ゆり毛利家譜代の老臣桂民部少輔廣重を以て甲城の大將とし東の丸ゑハ生石中務丞友秋西の丸ゑハ上山兵庫元忠を籠置れけるゑ生石此春より羽柴筑前守の智謀神の如く勢ゑ虎ゑ翼を添たるゑ似たをされハ戰ハ

勝責れハ取向ゑ所敵ゑふく味方の諸城三ヶ月の間ゑ四ヶ所を落其上高松の如き要害無双の地をハおもひも寄ぬ水責をゑ以て人間業とおもそれを我こゝ分際を以て是人ゑ敵對をるハ磐石を以て難卵を壓ゑ似たりそやく其謀をゑさにゑ終ゑ身上破滅遠からそとおもひたき如何せんと案し煩ひける哉急度思ひ出したるをゑ妙あれ備前勢の内ゑ洲波隼人佑ハ母方の從弟ゑり是ゑたよりて謀らそやと思ひしかハ密ゑ洲波ゑ就て筑前守へ通しけるゑより筑前守より隼人を以て今明日のうちゑ其城へ攻かるへし其時忠勤をそけそゑハ本領以下相違ゑく其上新恩ハ功ゑする へしとや遣そし者ゑハ生石大ゑ悅

ひよき時節ありとて本丸の方を窺ひけるゑ本丸の大將
桂民部ゑ老功の古兵ゑ於てけるゑより少しも油断をに夜
廻ゑ厳重ゑるを見ゑ生石大ゑ仰天しさくハ我謀をや漏
聞えしよりかく手ゑけく巡見をるゑらめ先んにる時
ハ人を制し後ゑ時ハ人ゑ制をら弘速ゑ其手配をゑにべ
しゑて夜中ゑ本丸ゑむゑふく柵を結鹿垣を付けるを暁
方ゑ桂ゑ家人是を見付かくと主人へ知せけて桂これを
見ゑ心得ぬゑ哉追手の方をゑ於幾重ゑも用心をへゑれ
本丸ゑ向ゑ柵を付るゑ何様逆心ゑるへしさらハ此方
ゑもへき様ありとて塀裏ゑ米の俵をひしくと積かさ
ね所ゑ搔楯かき去ゑ顔ゑてまちかけゑりかくとハ

知を生石中務備前の陣へ時分よしと告たりしかハ宇喜
多一黨洲波隼人を先ゑたて東丸ゑ去のひ入本丸ゑ向関
を上鉄炮を打かけるゑ桂ゑかねて期したるとゑれい
少しも騒ゑに去りまりかへりて居ゑりけるゑ筑前守の
本陣より生石ゑ知をゑより一勢一勢備を立鴨の城へそ
寄ゑける又西丸の上山兵庫ゑ関の聲ゑおとろき手勢ゑ
下知して持口をかためゑ矢玉をおしまに防くへしと下知
しつて待ゑのけし処へ蛙ゑ鼠の軍勢をき間も形く込入く
息をも絶せに責たくたりゑ生石中務ハ備前勢を先ゑ立く
短兵急ゑ責かゑり只一撃ゑ本丸をもみ落さんと責けるゑ
ゑ桂民部少輔ちりゑもひるゑに撃ハゑちかへし射バ射

かへ一其間ふる大水大石を投かけく防きけるハ備前勢
も責あくんて捨見えにけり此時両川の陣中ふるハ日幡
の城を取かへ一秀吉と無二の一戰をふ一勝敗を半時よ
次一高松の急を救えんとする処へ思ひもよらぬる鴨の
城より備前勢寄來て合戰をゐそ〳〵急なりと告一ハ
元春隆景ひさ一山の巔より上る鴨の軍を見定め殆ひ桂民
部火政をもちひふハ備前勢を追出さるゝ時ならん其時寄
手競ひやらハ筑前守も旗本を以て後詰をへきふ何とて
いまふ火を放たさるやらんと元春おきりに不審一ふへ
ハ隆景傍より民部よも忘れいせ一定めて風を見合をゝ
居おらん暫く見合せ後詰の勢をゝり出さハ羽柴勢も定

めて打出るならん日幡へ向ふすりハ地の理もよ一究竟
の事ぢりを元長經言壹万餘騎を引とけて鴨の城の後詰
ふ向へハ今や蛙ゝ鼻より討出るふらんと筑前守の本陣
を目もそるみたをまをゝり居ふひけるか案の如く風をこ一
吹かゑると見るやいふ鴨の城の本丸より東の丸へ火箭
を射かけたるか果一て東の丸の藁屋ふ燃付て猛火さか
んふ焼付のれハ備前勢大ふおとろき壯き者二人屋根ふ
そ一こをかけくさらくとかけ上り火を消んとをる処を
桂ゝ次男孫次郎廣明鉄炮ふて二人とも打おと汲其のち
ハ是を消止んともせさゝ一かそ火勢さかんふ一て餘烟
陣〳〵へなひけハ烟ふむせび炎ふ焦されいゝふせをやと

立騒く處を見まゝ一本丸の門を開いて三百餘騎おめい
てかゝる四方ハ面ふ切るまはり羅刹夜叉の如く荒ひるゝ
れハ備前勢外郭をまて〳〵辻出たり西の丸を守り居たる
上山兵庫是を見るいさや桂ふカを合せよやと云ふとも
そのれ是も同しく二百餘騎を真圓ふそるへ鎗鋒をそろ
へて突かゝれハ備前勢立足もなく追出されさり生石ハ
敵を前後ようけ手勢ハ多く討ゑ其身多勢ふ取かこまれ
かと〳〵難義せーを桂民部そるかよ見付ふくき生石ゝ振
舞かふいて一鎗よ突留んと躍るかり遂よ突ふせ首を取
此勢ふカを得て城兵手ちけく防きけるかとよ寄手のこ
り好く追出されゝり桂民部少輔ハ味方をさ〳〵ゆねき城

門をメさせ役所くの火を消さを暫く息を休めゝり筑前
守の陣中ふてハ鴨の城よ火のかゝるを見てをハや切り
らんと逸冲ーかとも秀吉是をハ見むきもせゝ備前勢敗
軍のよーを注進せーかハ去ハ打出て援よやと態と陣中
ひーめき立ハ元長經言両將一万余騎ふて鴨の城より西
七ハ町を隔て陣を取て居ゑひけるゝ筑前守の陣のいろ
めくを見て敵掛らハ一戰よ勝負を決せんとかさ川を飲
て待ふとふ廂山ふてハ今や五色の吹ふかーをなひるを
て馳かゝる其時たそ總軍一度ふ切りて中國武士の鍛ひよ
鍛ひー又をあらをさそやと氣を張て物見を出し羽柴の
陣をうかゝへハ備前勢より加勢を請とそふそゝ急ふる上

羽柴羽濃守秀長去きりふ早く御出馬有へくいそく付入
よ鴨の城をうち破て其帰て足よ両川の勢を切崩し可申
と訴ふる由を注進仍元春隆景うち寄てさいの筑前守
も此手だくにのうしそ見ゆる牧今日おそ毛利三家の者
と筑前守と初度の軍ふれきたるひきく敵よ笑える形カ
をたくして働けや人くそ勇め給ひけるふ依何も今日を
それとおもひきり敵の陣を見てたをは中村孫平次亀井
武蔵守筑前守の本陣よりかけ来て小旗を以て味方を招
けハ持場くへ立備へ堅くまもりて居たりけるかおそら
くして筑前守陣頭へ乗出し采配をそりて東西をまねき
ゆへハ間もなく武者二騎駈出て例の小旗をふりふひか

それハ既ふ打立ぬと見へ諸軍勢いつれもくをのれら
陣々へ引て入中ふも備前勢ハいと本意ふけよかこちけ
るハ我々隆景をくひ留ヤそうちふ御旗本より吉川の陣
へかくらせゆそ毛利三家を打えたさんと手の内よいひ
しものをと恨みける由を秀長より筑前まへヤおくは掛
てよき軍ふらハ宇喜多おとときにふらふへけんや十死一
生と思ひ切し死武者をあしらふ内よ堤きられて詮ふし
と宣ひやりて飛脚を走らをて早く御下向毛利三家を打
えたさせ給へと注進したりけり

重修真書太閤記六編卷之十四終

重修真書太閤記卷之十五

青山與總上使の事 并明智光秀坂本へ帰る事

毛利三家の軍勢十二万餘騎高松後援として出張あるー由羽柴筑前守の早馬安土へ到着せーかハ織田殿大小驚かせおひ急き出陣まーはをへゝれともまゝ諸大將諸物頭衆先立そ備中表へ下向ー筑前守ふ手を合をへーとそ下知ーまふ爰ふ明智日向守光秀ハ饗應の役をめー放たれ心中そふそゝ憤をふゝーといへ共且そ其色をあらはさゝ上ふ忠義をつくゝと云共家臣明智左馬助四方田但

馬守岡田太郎作匹田帶刀藤田傳吾ら輩能主人の本心を
さつしいつきもく怒をあらへり光秀を諫めけるハ事
新しきヤ條まハへ共君ハ正しく源氏の嫡く織田殿譜代
相傳の主從ふもまさに但一且のよしにより君臣
とハヤものく御恩かとも骨をも折ひひ然るふ織田殿
のふさ形く様たとへハ塵芥の如くふふしもふ上のらハ
君まく仇讎と見ふそんと誰のハ悪しそヤへき早く織田
家を立退をふへし坂本ふもあれ龜山まもあれ御心の
おもむかせふ處まて一まり御恐ひいへし左あらんふハ
忽ま大勢を差向ふへし去共安土の侍大將衆まのきハ
と思ふ人も形し軍畧智謀を以くぬく若ともを切ちら

十分ま手を碎らをふそく遂ふハ織田殿出馬のるへし其
時我く死力をのくし御大將を討奉らハ夫ま天下に御
旗を立られて明智將軍といそれふそく我くまてもいか
そかりか本望たらんと進しかハ日向守是を聞今ふそし
めぬと形き共其方共の忠心義贍感をるふあまりの事併
其方共の心と光秀らまくろとい聊相違の處のう包て
詮ふきと形れそくしく語らん能聞ま元来某ハ美濃源
氏されとも世ふそふらのされ丹波の國まて生れたり但
浪人の子ふり是といふへき知行ともたに朝夕の烟の代
ま鉄炮もく鳥獸を討取米まもかへり錢ふもかへ夫まて
一生を送さんとロおしと思ひ立ての仕官のそしめハ十

石の瘠田それより丹波を立のいて越前國ゑ年をつゝ終
ゑ織田家ゑ有付て多く軍ゑ忠を盡し今ハ坂本龜山と二
りの城もちこれハ誰か蔭ゑる甚きゑへゝ織田殿の恩ゑる
甚や恩を知ぬハ人てゑ一いろゑ道理をえりせ一折檻
ゑあゑとても主人のエゑてゑる形れハ何と恨こん筋も
ゑ一といえるれハ四方田但馬守大音聲ゑてやけるハ君
と形り臣と形ゑたゝ恩の一字のゝ恩あれゝ君とゑ一恩
ゑけれハ仇とゑる恩ゑカと取ゑる処也是まて幾度と
ゑき戰場ゑ御供一て身ゑ負たる疵のいゆる間ハゑけき
ともたゝ是君ゑ情のゝゑれかゝちゑ付まとゑて御先を
致一ハ形れ今織田殿の織田殿さるハ全く君ゑ越前より

義昭卿を供奉一奉て前將軍の仇を復一新將軍を立奉て
扱ハ朝廷の宣旨と云ゝを教まいらせ一故そかーそれを
そおもそゝ今織田殿の御振舞偏ゑ狂人とおそ見えたん
ゑれ早く始終を御見極有て御身の安危を定めさせゑゑ
けれと勸めーやとも光秀更ゑ動もやらに重ねて但馬守
やけるハ然ハ某ゑ暫時身の假をゑそるへくゝとやに依
光秀何形れハ左樣ゑハやゝ甚と有一かハ但馬守ハ形その
由ハやゝ一ハ只三四日にゝゝたうやへくゝとや時光秀
やおれ但馬守それ等のゝいゆめく無用ゑいたー可申打
ゝよけきハ光秀ゑうハ汝か手をかるへきや彼人無双の
寵愛人形り事の破きの根源とゑるへきゝを知ぬかとの

其方ら孫と迷ひて了見もくらきー様といえれど但馬守大ふおとろき君よりハ早某ら胸ゑ蓄へたうー秘事を悟らせ給ひーふや怖ーき御眼鏡やと去えしハ物もいえさうき然るゑ並居ー諸侍いたれも異口同音ゑ但馬らヤを御ゆるーれくハ速ゑ此を御退ハへー何とく居ゑからを讒者の剣を待せゑふそや餘ゑとヤせは御心おたやら過く云甲斐れーとヤけれハ光秀いや左ゑ言ぬものく讒者の為ゑ腹切く忠臣と云ゑれハ子孫のための面おこー菅丞相を見よや人く讒者の為ゑ流されさをゑへとも少ーも朝家を恨をゑえねハ何ゑ今ゑ菅家の栄ふるゑれと云り〻更ゑそうあえねハ何ゑ退出ー明智左馬助ら宅へ寄

合く織田殿の此日頃主人をふくまをゑふと大形ゑら孫ハ程れく災の出来へしそれを甘んーく罪過ゑやくゑら忠臣と名を付られー人ゑるへけれとそれゑ時ゑも世ゑもよるをゑり我くも主人も元より所由のあるゑハ非只一日の恩のさめゑたやをく命ををりるれ君辱められハ臣死をといへり主君の顔をうたれーより外ゑをりらーめら紙ーを又有へきや臣等ら死をへき時節到来左ゑおゑさけや人くといへハ何も尤ゑうと同心ー如何ゑーてかハ死ゑゑーと云ハ齋藤内蔵助進を出面く一同ゑ死をへーと思ひ定めゑをく神文ーて連判せんと云つく内蔵助一番ゑ名判を居血をそくきて楚指出ゑ差次ハ明智

左馬助次第くふ書加へしやハ三百餘人とありふけりやふ
処ゑ安土より回文とゝく来るを見るふ此度西國へ御出馬
あるへし依て面〻分國の諸軍兵を引率し先達ゐ麗下ゑ
羽柴筑前守指圖をうけ合戰の忠を致さるへしと有て筒
井順慶細川與一郎池田勝三郎高山右近中川瀬兵衛明智
日向守蜂屋兵庫頭なりさるきたゑ憤をふらく主の為ふ
命を棄んと誓ひし侍とも此廻文を披き見て筒井細川高
山中川ふとハ新參ゆゑ小身ふりそれらと組合をさるく
のゝゆゑらを羽柴筑前守ゑ指圖ふ付とハ何ふ様や此廻文
の御請ハ御斷ありゝ然るへしと云とも更ゑ耳ゑもかけ
ゑ奉畏と請書して其次へ廻しけるか順達終て安土へか

へれハ信長一〻請書を見ゑひ光秀めゑ奉畏ゑやハとて
蘭丸ふ見せ給ふ蘭丸とくゝ見終ゑ光秀此廻文を何共云に
奉畏と申上しハ内心ふ思ひ立事の有と覺ゆ二葉ふして
摘ゑ斧を用ふゑやとも此蘭丸御使とやて光秀ゑ宅へ行向ひ
討果しやへくゆと言上しけれハ信長打笑ゑひ汝ゑ處ゑ
き間ふし然とも光秀を汝ゑ討をふい光秀ゑ家人とも汝
を討へしさゑれハ我汝を失ふの損あゑ因ゑ自然と光秀を
滅ふゑ謀ありとて青山與總右衛門を御使ふて仰出され
けるハ此度西國へ下向し毛利三家を追討し軍功を顯ゑ
ゑへし右ふ付出雲石見両國を賜ゑふ處也其餘の事ハ軍
忠ゑ因ゑ御沙汰あるへしと也と演説ゑれハ光秀も大ふ

悦ひ何ふも不思議の大將あふ怒を忍へゑ狂人の如く打
もー擲もーゐへと又二ヶ國を切取次第と荒凉ふ仰出さる
との難有よと涙を流して喜へい今まて眼ゑ血をそゝき
ー諸侍いは迚も主人の心の正しく廣きを感ー又織田殿
の凡人ならぬ處置を深く仰き裏そ川かーの我くら短慮
かふと後悔をるもいちしるー暫くありて與總右衛門立
上る跡の仰をいそんとせーろ天質臆病ふるか故ゑ光秀
か顔色といひ家老中の体相ふ恐ゑ只何とふく見合をゐ
けれい光秀も不審くおもひふから上使のと形ゑハ謹そ
居りるふ與總右衛門門外ふく馬ふ乘手綱をさへきて上
意いとつふゑより光秀門外ゑかーこまる時丹州一圓并

ふ坂本領名上らる由ヤ渡ー鞭を鐙ゑ合をそ馳歸る光
秀ふたゝひ驚き考へーものをも得いそ今賜そると云
出雲石見ハ人の國形ゑ弓矢の上ふく切取國ふらハ二ヶ
國ふくも三ヶ國乃至四五ヶ國も是ハ我身の手柄あり君
の御恩と云へきや丹波といへと光秀か粉骨碎身ーて切
取ー國形ふをや但丹波ふ坂本名上られー上からハ此屋
敷も不用ふゑ殘ゑ形く坂本へ名連ゐきて沙汰をへーい
ざや人ゝ我ゑ續けと云形から
心ーらぬ人そ伊ともいそくいへ身をもおーす名をもおゑ
と詠ーけゝく坂本ふ著城代明智光廉入道長閑齋を始め諸
侍一同へ坂本を名上られー由をたけそれより奥方ふ入

妻女ふ面會ー五月廿七日坂本を出て愛宕山へ上り神前
ふ禮拜ー て光秀所願成就せへくハ一を授け給へと念ー
て闔を取けるふ一を得たりーかハ大ふ悦ひ從臣らふ是
を示し今一度一を御授けと念ー て是を披くゑ又一ありー
かハいかにも神慮也てゑ斯の如ー後たのもーと再拜
九拜ー中國出陣祈禱の為と披露し其夜ハ西の坊威德
院行祐の坊ふ止宿ーたりけう
軻遇突智を祭る軻遇ハ赫奕なり突智ハ衝撃ありけき
打てかゝやくものハ火形なり故ゑかくいちを火神と云也
天應元年慶俊法印勝軍地藏の法を修ー此神の本地と
ふー朝日峯白雲寺愛宕大權現と云社領五百八拾石余

と云
明智光秀愛宕山ふて連歌の事
并宇野豊後守を招く事
明智日向守光秀ハ愛宕山ゑのぼりー宿ーけるか大望成
就の時いかゞて神慮既ふ加被力を施ーゆふと云ハ再度
得がたき今宵ありいさや百韻の連歌を催ふーこの短夜
を明さゝやとて花の本の宗匠紹巴法橋昌叱法橋心前法
橋兼如法師及ひ上の坊大善院宿源等を招きけり發句ハ
時ハ今天下ーふふ月かな　光秀
水上まさふふそのなかれ山　行祐
を始る池の流を堰留て　紹巴

風も雲をふきをくられ　宥源
そふも松陰のひさやさえ後　昌叱
かたしく袖もあくあけのしも　心前
裏かれぬ成ぬる草の枕して　行澄
尾上の朝ぬゆふくれ若草ら　光秀

紹巴も松村氏臨江齋と号し今年五十九歳宗祇法師四代の正嫡なり昌叱ハ同しく宗祇五代里村昌休の男也心前ハ紹巴の門人兼如ハ猪苗代兼載の玄孫なり此百韻光秀の句十六句あり名残花を

そ松も香も碎を勸む花の年　心前
風くも松のとかなふとき　光慶

執筆ハ明智家人東六郎兵衛行澄和歌連歌の達人也光慶とハ光秀ら嫡子十兵衛光慶なり舉句ハ光秀あれとも態と代句とせり發句ふ時も今といひ舉句ふ長閑ある時といふ光秀本姓義濃國の源氏土岐の正統なれハ名字の土岐を時とかよそせて今度本意をとけハ天下を知四海四め時のとかゝせすとの心の祝をふくそしゝ紹巴ハ世ゆるされし達人なれハそやくも光秀ら心をさとり謀叛の企ごさんなれと心ふこめて第三を花おりふ池の流をせきとめてと付しあり

紹巴の懐紙愛宕山ふありしを紹巴のちふ登山して堰とめて云処をけつりく又堰とめくと書ておくしとゝ

後筑前守ふ問れし時此懐紙を取寄て筑前守ふ見せ紹巴もよく人ゑ悪まれてい懐紙ふ手入ーてかくの如くいとヤをーにより筑前守の疑心を散しけるゑ云ゑ然ふゑ山崎の軍破き光秀殺され羽柴筑前守入洛ーて後此連歌のゑを聞及それ紹巴を召て其方ハ花の本の宗匠と人ゑゆるされーもの形り光秀り句意を悟らぬゑもあらー悟ゑふから知ぬふりーて第三を付りるか何ふ何ふとあゑし時紹巴をこーも動せ以何様光秀句意ハ天り下をこゝろふまり廿せてんと祈る詞ふいへハ謀叛の兆と存ーいゆ名花落るとヤて栄華ふかこるとも落る時又遠からーといふ意まて謀叛を堰留てと付ていひーるり

其上紹巴り心中の餘蘊をヤへくい此第三の二字目を折て歎きとヤ詞を截入ゑ致ーい得共是ゑ誰も存ゑまーくとヤてけり

ゑ形おりるいけのふれをせきとゑて筑前守是を聞形けきの折句誠ふ感心ーていりさゑ二字目ふれそたやゑく人の知ぬもおとそり形り光秀も心付さりゑ見えたゑ紹巴手柄形りゑ賞義有ーゑのや是より筑前守紹巴を師ゑーて連歌をゑ形ひーとゑ扱も百韻終ーかハ大權現の御前ゑ黄金三十枚鳥目五百貫を獻しる天正大判八金重四十四匁あり位上ゑなり重四匁四分を一両とゑ因て大判を十両ゑ云多門院日記天正九年十

二月廿八日の条ハ金子一枚買之代米廿六石とあり然れハ卅枚ハ七百八十石ハり今の七百四十八石八斗ハ准ス千八百七十二俵ハ當る鳥目ハ同日記十二年六月の条ハ鍬一貫ハ一石五斗金子五匁五分ハ三石四斗三升八合の相場とあり金一枚ハ三十石〇二斗五升四合四勺ハ當る然れハ金一枚鍬廿貫百六十九文六分なれハ五百貫ハ九米七百五十石の價なり

三拜の後威德院ハ歸ヲ一日夜の宿料とて五百両を與へ紹巴昌叱心前兼如大善院ハ各五十両〳〵愛宕山中へ二百貫を與へ丹州龜山へ歸る爰ハ織田殿ハ五月廿九日安土の本丸ハ池田孫十郎加茂兵庫野〻村又右衛門遠山

新九郎世木弥右衛門市橋源八郎楠田忠兵衛二九ハ蒲生右兵衛大夫森次郎左衛門雲林院出羽守鳴海助右衛門祖父江五郎右衛門佐久間與八箕浦次郎左衛門福田對馬守山岡三河守千福遠江守前波弥五郎を留め置れ其外の將帥ハ分國の勢を催ふ〻西國へ發向をへ〻て御暇を賜へり〻ハ近習の衆百五十餘人手廻ヲとも三百餘人ハて入洛ハり御本陣ハ本能寺三位中將信忠卿ハ妙覺寺ハ宿〻ハ其間えつのハ三町半ハ過さり多ヲ又光秀ハ丹波桑田郡卯川の住人保津右のむら山本三ケ村ハて三千石の領主宇野豊後守の許へ路次より使を立て只今龜山へ御越あれとヤ遣ス是ハ名譽の軍配者ハるを以て於

り豊後守此節腕ゑ癰物あるゝ歩行まて心ゑ任さんと云
とも光秀の招き昨り往きハ如何と思案し名供をつのふ
二人ふて忍ひく亀山ゑいされハ光秀神速ゑ出逢四方山
の咄してのち數寄屋へ通し近習を遠さけ日頃の鬱憤を
かたりいゝ者ハ宇野近く居よりさてハ謀叛の企ふ
りやと問光秀こさへくされでハ住ふれし坂本をよひ當
城をハ名あけられいまゝ見も聞もせぬ出雲石見を賜そ
ゑハ此國いまゝ毛利の領國ゑハ然ハ光秀今ふ於て立錐
そゝりの知行もハそハ立ハ事あるかち理ふし共
ヤされまし一方の大將して給ハへとヤけれハ宇野ハ明
智の顔をうちまもゑ喬木風ゑ倒るゝと云とゝさの如く

主君ハ今日本ふて一人二人といそゝく人形りゆるらかゑ
世ふ從ひゆそゝ終ゑハ天下をも知へきにおしむへしく
今をこし御工夫ありて然るへしと云ハ光秀もゑし形き
ゑを言出しとハ思ひふから態と形を改めて我ふから誤
てうあやまてう然ハ御異見ゑ就そゝユ夫仕るへしとヤ者
ろハ豊後守も大ゑ喜ひ天晴くく堪忍の二字を能く御案
ハいへしこヤかハ者御歸城路次の御つゝれもハへし御
暇ヤハ明日又もや参上しゆるく伺ひヤへしと言葉のこ
して退出ハ

ordentlicher Professor
Doctor medicine

Nausigo Motowa nagatoga ni
Aiischizne Hanga kanahada
Takashi Motto yasu Kusayo
jai gai

Fu-kni ty Kizaku Naka ma

重修眞書太閤記六編卷之十五終